

# 春風秋霜 12月号

平成 30 年 12 月 1 日  
島田市教育委員会だより  
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

## 1 大井川マラソンについて

10月28日(日)に行われた大井川マラソンでは、多くの中学生ボランティアが大変活躍してくれました。今年の中学生は、これまでになく大きな声でランナーに声をかけるなど、積極的な姿勢が見られました。

金谷中生に声をかけると、「完走したランナーが互いに抱き合っていて喜んでいる姿に感動した。私もいつか走ってみたい。」と話していました。ボランティアとして人に役だつことも貴重な体験ですが、視覚障害者や最高齢93歳の完走など、感動的な場面を目の前で見るとも貴重な体験だと思います。今年ボランティア参加者の感想を学校で広げていただけたらと思います。

多くのボランティアに支えられ、無事に第10回のマラソン大会が終了できました。多くの走者が温かなボランティアに感謝していました。来年もボランティアへの参加者が一人でも多くなったらと思っています。



ランナーズチップを外す中学生

## 2 木材見本市の見学について

10月24日(水)の午前中に、六合小学校と六合東小学校の3年生が、駿遠林業で行われた木材見本市を見学しました。子供たちは、会場一面に並べられた大木に見入っていました。今年は台風のため、神社の倒木が多く、例年になく銘木が集まったということでした。森町の小國神社から運び込まれたヒノキは、目が詰った素晴らしい材木でした。

子供たちは、木材の見学の外、住宅用柱のプレカット加工(材木の組み合わせをするための加工)なども見学しました。係員の説明を受けながら、工場内を見て回りましたが、木都島田を実感する体験になったと思います。



市教委では、「地育」を推進し、地域の教育力を生かした教育を進めています。駿遠林業のような地域の企業が積極的に会社を公開していただくことも、「地育」につながるありがたい活動です。製材所がどんどん減少している中、頑張っている地元企業の価値を子供たちに伝えたいものです。

## 3 インドネシア・カンボジア親善使節との交流

10月29日から11月1日まで、親善使節が市内の小学校を訪問しました。親善使節の大学生は、学内の厳しい選考を突破し、訪問に向けての特訓を受けてきた方々です。そのため、自国の紹介を様々な工夫をして行っていました。インドネシアには600を越す言語があるなど、これからのグローバル社会を生きる子供たちにとって、必要な知識を得る場にもなったと思います。



民族衣装で文化を紹介する使節

親善使節の皆様は、子供たちの合唱と合奏の素晴らしさや、ゴミが見られない市内の様子に感心していました。島田市や日本の良さを実感してくれた親善使節の皆様は、インドネシアやカンボジアとの相互理解や交流のために、母国と日本との架け橋になってくれると思います。実際、これまでの使節経験者の中には、再来日して日本の学校で学んでいる学生もいますので、今後も使節の受け入れにご協力とご理解をお願いします。

#### 4 全国都市教育長会理事会から

11月1日（木）に行われた標記の会において、文部科学省からは、第3期教育振興基本計画の概要についての説明がありました。基本的な方針として、①夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要な力を育成する。②社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する。③誰もが社会の担い手になるための学びのセーフティーネットを構築する。などが示されました。

今後の教育政策の方向性の中で強調されたのが、超スマート社会（Society 5.0）の実現に向けた対応です。具体的には ICT の活用を進め、新時代に合わせた力を育成することが求められました。これらの内容は、市教委が進めてきた「夢育・地育」と重なりますが、ICT 関係は、今後の重点課題となります。少なくとも小学校高学年以上では、パワーポイントを使ったプレゼンテーションができるくらいの力はつけたいものです。

## 肘かけ椅子

平松 栄治 教育総務課長

### 「昭和・平成・〇〇の時代にふと思うこと」

最近、「平成最後のドラフト会議」、「平成最後の紅白歌合戦」、「平成最後の年賀状」といった、平成最後という言葉をやたら耳にするようになってきた。

年が明け1月7日には、昭和から平成に改元されてから30年、4月30日には平成の時代が終わる。世界で唯一、日本だけで使われている元号を決めるには、総理大臣が若干名の有識者に候補名の考案を委嘱。有識者は2案から5案程度の候補を、その意味や典拠（てんきょ）などの説明を付して提出するそうです。選定する時には、アルファベットの頭文字を使って表す際に不都合が起きないように、明治のM、大正のT、昭和のS、平成のHと重なる元号は選ばれない可能性が強く、ア・カ・ナ・ヤ・ラ・ワ行のいずれかから始まる新元号が採用される可能性が高いということです。

豆知識はさておき、昭和38年5月1日に生を受け25年8か月と6日、昭和の時代を過ごしました。様々なことを経験し、自分の人間形成の土台が出来上がったのは、間違いなく昭和の時代であったと感じています。黒縁のメガネをはめ、後に総理大臣となる小淵恵三官房長官が、額に入れられた「平成」の書を掲げ、「新しい元号は『へいせい』であります」とテレビで発表した時には、初めて聞く言葉に違和感を覚えました。

平成元年4月に旧川根町役場に就職し、平成4年に父親と平成26年には母親との別れがありました。同時に、失敗ばかりを繰り返しながら、仕事と3人の子供を育てることにアクセクした（している）時代が平成です。これも間違いのないことです。

最後に、新元号のスタートの日が56回目の誕生日となります。その後、待っているのは定年退職、第二の人生のスタートです。そして、昭和、平成、〇〇と自分らしく生きてきた人生を全うすることになる時代が〇〇だと思います。これは…多分です。

※典拠（てんきょ）：確かな根拠。文献などにみえるよりどころ